

【学術変革領域研究（B）】

ディストピア倫理学：自己の境界を不確定にする未来テクノロジーに向けて

	研究代表者	筑波大学・人文社会系・准教授 太田 紘史（おた こうじ）	研究者番号：80726802
	研究課題情報	課題番号：24B102 キーワード：自己、テクノロジー、技術哲学、技術倫理学	研究期間：2024年度～2026年度

なぜこの研究を行おうと思ったのか（研究の背景・目的）

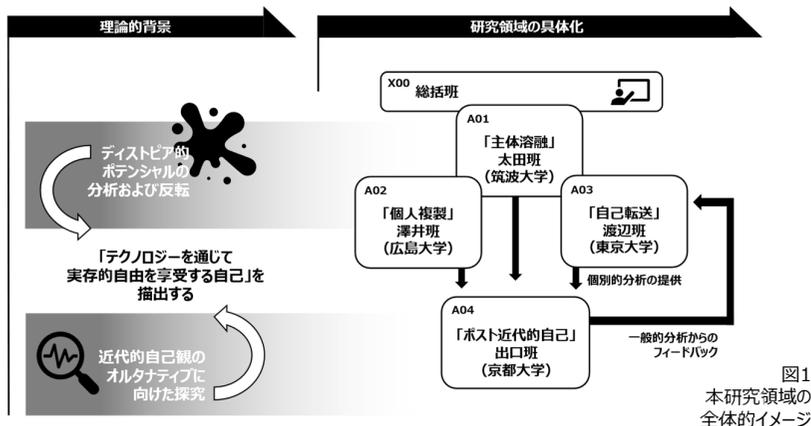
●研究の全体像

文明勃興以来、人類の生きる環境とはすなわちテクノロジーで構築された環境である。その環境を通じてテクノロジーは、人間が人生において何を体験し、何を記憶し、何を意志し、何者になるかということ、つまり「自己存在」と言ふべきものを根源的な仕方規定している。こうした自己存在の不定性、そして近代以来の科学技術文明により強大化するテクノロジーのインパクトは、自律性や自由意志といった理念を核とする近代的な自己観によって恒常的に不可視化されてきた。

しかし現代において、身体や精神に介入して改変すること自体を目的とするテクノロジーが劇的に発展し、自己存在の不定性とテクノロジーのインパクトが前景化され始めているなかで、近代的な自己観が記述的にも規範的にも有効性を失いつつあるとともに、オルタナティブとなる自己観の探究が不可避の課題となっている。自己観の刷新を求められる契機は哲学史的なかでも繰り返したことが、この課題が今ほど文明の事情から求められたことはなかっただろう。

なにより、こうしたオルタナティブとなる自己観の探究は、身体や精神を改変しようとするテクノロジーの発展を積極的に受容し、それを通じて実存的な自由を享受する自己存在、つまり「テクノロジーを生きる自己」を描き出すうえで欠かさない。これに取り組むうえで、まずそれらのテクノロジーが自己存在に対してもたらす破滅的帰結のポテンシャルを、一種のディストピア的状況として予見的に分析すれば、それと反転させる形で「テクノロジーを生きる自己」を描き出すことができるだろう。

こうした背景と展望のもと、本研究領域は、実際に構想中あるいは開発途上にある未来テクノロジーを標的とし、倫理学諸分野をはじめとする哲学研究において培われてきた知見と手法によって分析を進めていく。このアプローチは、フィクション作品の分析を通じた文学研究や社会批評という形で行われてきた従来のディストピア研究とも、大きく異なるものである。



以上の観点から今回標的とするテクノロジーは、ヒト脳どうしの直接的通信を可能にするテクノロジー、ヒト組織を培養するテクノロジー、ヒトの意識を機械へと転送するテクノロジーの3つである。本研究領域は、これらのテクノロジーがいかにして「自己の境界」を不明瞭化しながらディストピア的状況を生み出しているのか、そのポテンシャルを分析する。さらにこの分析とポスト近代的な自己観の構築を統合的に遂行することで、テクノロジーの発展とともに実存的自由を享受する人類社会像を描き出す。

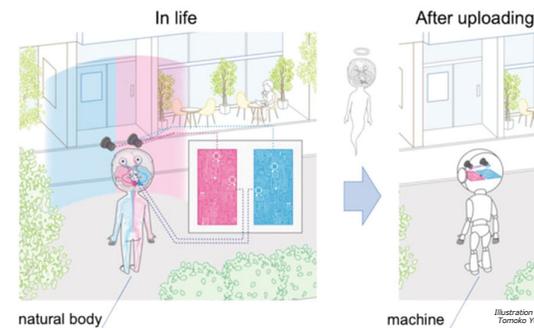


図2 ヒト脳の機械置換を通じたアップローディングの構想 (Watanabe 2022)

この研究によって何をどこまで明らかにしようとしているのか

●計画研究A01 思考融合のテクノロジーと「主体溶融」の倫理学（太田班）ヒト脳を機械と接続する技術や、それを基礎としたヒト脳どうしの直接的通信に焦点を合わせて、これら開発途上にあるテクノロジーが浸透した状況における自己存在の変容とその社会的側面に関する倫理的検討を行う。それに向けて、自己と非自己の思考の区別が不明瞭化する事態を「主体溶融」として概念化し、それが精神現象としてどのように顕現しうるかを検討するとともに、主体溶融に伴う社会的相互作用や社会構造への影響を予見的に分析する。



●計画研究A02 ヒト培養技術を用いた「個人複製」の倫理学（澤井班）胚モデル研究や中絶胎児組織研究といったヒト発生研究に伴う倫理的・法的・社会的課題を体系的に扱い、それらに関連分野の専門家や非専門家と論じることによって、ヒト発生研究における倫理基盤の構築を目指す。昨今、分野の専門家・高度化に伴い、科学と社会の分断や乖離がむなかく、我々がヒト発生研究をどのように発展させたいか、また我々がどのような社会に生きたいかという未来像も考慮しながら、ヒト発生研究の倫理的・法的・社会的課題を共に論じる。



●計画研究A03 アップローディングの現場から追求する「自己転送」の意味（渡辺班）研究代表者の渡辺が提案してきた「アップローディング」の手法においては、機械脳半球と生体脳半球の意識の統合、さらには、生体側から機械側へと記憶を転送することで、左右の生体脳半球間の関係性を機械脳半球と生体脳半球の間で築く。その後、両半球にまたがっていた一つの意識は、片半球のみの一つの意識へと移行することとなる。本研究においては、代表者の唱えるアップローディングのプロセスとそれがもたらすアップロードされた状態を高い精度で踏まえたうえで、その実現が社会にもたらす倫理的なインパクトを意識しない自己の同一性や連続性の観点から紐解いていく。



●計画研究A04 ディストピアを克服するポスト近代的自己観の構築（出口班）本研究は、「テクノロジー受容かディストピアか」というジレンマを回避しうるポスト近代的自己観を構築する。具体的には、自己＝自律的・自足的個人と考える近代的自己観、さらにはその自己観に基づく技術の倫理基準を一旦、非自明視し、新たな集成的自己観(Self-as-We)、ひいてはそれに基づく新たな自由観や技術倫理の構築を志向する。さらに、思考・意識・行為の受動者(パシエント)としての「わたし」という個人観(I-as-me)の主張可能性を探索する。これら2つの視座を交叉させ、検討対象であるエマージングテクノロジーの「自己境界侵襲性」の内実を再検討することで、ジレンマ脱出の概念的道筋をつける。

